



**Data**

監督・脚本: フィリップ・ヴァン・レウ

出演: ヒアム・アッバス/ディアマンド・アブ・アブード/ジョリエット・ナウイス/モーセン・アッバス/モスタファ・アルカール/アリッサル・カガデュ/ニナル・ハラビ/ムハマッド・シハド・セレイク

### ■■■ショートコメント■■■

◆第67回ベルリン国際映画祭でパノラマ部門観客賞を受賞した本作は必見!しかし、私を含む多くの日本人は中東情勢に疎いから、『シリアにて』と題されても、一体何の映画かサッパリわからない。チラシには、次の見出しが躍っている。

シリアの首都ダマスカス。アパートの一室に身を寄せる家族とその隣人。泥沼化する戦地の今を、ある女性の視点で描いた、家族を守るための、終わりのない24時間の密室劇。

◆また、本作のイントロダクションは次のとおりだ。

三児の母であるオームは、自らが住むアパートの一室をシェルターにして、家族と隣人ハリマの一家を市街戦の脅威から守っている。一步外に出ればスナイパーに狙われ、爆撃が建物を振動させ、さらに強盗が押し入ろうとする。果たしていつまで持ちこたえられるだろうか……。第72回カンヌ国際映画祭最優秀ドキュメンタリー賞を受賞した映画『娘は戦場で生まれた』や『アレppo 最後の男たち』『ラッカは静かに虐殺されている』などのドキュメンタリーで繰り返し描かれてきた、死者数十万人、戦後最悪の人道危機ともいわれるシリア内戦の悲劇を、武器を一切持たない一般市民の女性の視点で捉えた、家族を守るための、いつ終わるとも知れぬ24時間の密室劇。

◆近時の邦画は説明調のものが多く、TVドラマ並みになっている。ヨーロッパの映画はその正反対だが、本作は中でも説明なしの立場が際立っている。冒頭のスクリーン上には、ある町の風景が映し出され、そこで市民がスナイパーに狙い撃ちされるシーンが登場するが、これって一体ナニ?

◆チラシに書かれている本作のストーリーは次のとおりだ。

シリアの首都ダマスカス。いまだ内戦の終息は見えず、アサド政権と反体制派、そしてI

Sの対立が続いていたが、ロシアの軍事介入により、アサド政権が力を回復しつつある。そんな中、戦地に赴いた夫の留守を預かるオームは、家族と共にアパートの一室にこもり、そこに身を寄せた隣人で、幼子を持つハリマ夫妻とともに、何とか生活を続けていた。ある日、ハリマの夫がレバノンへの脱出ルートを見つけ、今夜こそ逃げようとハリマに計画を話していた。脱出する手続きをするために、夫はアパートを出て行くが、外に出た途端、スナイパーに撃たれ、駐車場の端で倒れてしまう・・・。

しかし、スクリーンを見ているだけでこのストーリーがわかる日本人はHow Many?

◆本作のチラシには、「凄まじい緊張感、強烈な閉塞感で息が詰まりそうになる・・・これこそまさにタイムリーな映画。」「入念に演出された、緊張感溢れるスリラー。」等の絶賛の声が載っている。たしかに前記の賞を受賞したのだから、本作の素晴らしさはわからないではない。しかし、本作は私にはノーサンキュー！そもそも、オーム（ヒアム・アッバス）はなぜこんな状況下、このアパートに住むことにこだわっているの？そもそも、それが私にはサッパリ・・・。

2020（令和2）年10月5日記